

福岡大学 医学会ニュース

No. 55

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

福岡大学医学部へ

名誉教授前病理学教授

菊池 昌弘



福岡大学医学部も本年三月で創立三十五年となったが、私もそのほとんどの期間を大学で過ごし、医学部には二十七年籍を置いたことになる。創立時の前途への期待を含め、所属する各人がそれぞれ思いを持って日夜励んでいた時代が懐かしう思

われ。その後学生も揃い、病院も拡充されるとともに、伝統とも言べきものが形を失いつつある。その評価がどうであるのかについてはその基準をどこにおくかにもよるが、ぜひ考えてみてほしい。

学生ならびに卒業生の素質については、いずれの世代も大変素晴らしい人物が大多数を占めているように、大学教員で真

ることは明らかである。これらの人々を医師として育てたのは、前半においては多くは他大学出身者であったが、今日ではスタッフの半数以上が卒業生であり、実務の中核を占めていることから見て福岡大学出身者である。今後はまさに先輩が後輩を指導し教育するという姿が一層明らかになるであろう。

そのためには、今後の医学部・病院を指導するそれぞれが、医学部・病院の本質について熟慮し思いを馳せて、そこに関与する要因に対しての心ある選択をなすことが必要である。既に田中美知太郎(哲学者、一九〇二—一九八五)が述べているように、大学教員で真

性の研究者で有り教育者であるものは恐らく一割であるので、無能者連合が勝ちを制するのは必至であるとされる。このことは今日でも変わらず、福岡大学医学部についても、このことを肝に命ずべきであろう。その要因として、物事は個人的利害と嫉妬が決めるとされる点がある。

これはどの社会に於いても強烈であり人間の根幹である。しかし、嫉妬に泣く者は根性がかけられていることが多い。これを乗り越えうる人間性豊かな卒業生こそが中核となり、力を発揮し、新しい福岡大学医学部の伝統を作り上げることを福岡大学医学部出身者に期待したい。

回顧

名誉教授前生理学教授

今永 一成



福岡大学に医学部が創設された昭和四十七年、私は生理学助教授として九州大学から赴任しました。四年後金沢医科大学教授に転任しましたが、昭和五十四年幸運にも再び本学教授に招かれ、爾来二十八年間生理学の教育と研究に専念してまいりました。医学部も着々と発展を遂げ、三千名を

超える卒業生も夫々の分野で活躍していることは大慶の至りであり、医学部はもとより、学生部委員、教務委員、国際交流委員を務めたためもあり他学部の多くの先生方そして学生諸君との素晴らしい邂逅を懐かしう思い出します。退職にあたり二、三回想してみたいと思います。

大学の使命は教育であり、元々の低い話ではありますが、低学年の間に「如何にして医学部学生としての動機を萌芽させるか」、「それまでの受動的学習習慣を如何にして能動的自学習へ転換させるか」でありました。最良と思われる策を試行錯誤して来ましたが、

も何度となく変わりました。しかし、学生諸君の自覚なければ講じられる多くの策は画脂鏝水でしょう。そして手取り足取りの教育は「百害あって一利なし」と思うのであります。「興味をもたせること、集中力を養うこと、自信をもたせること」が肝要と思いましたが、「学ぶことは自分でやること。自分でやるしかない。そうすると間違える。だから覚える。間違えることを嫌うと安全に学べる」としか学べない。しかし、学問は安全第一では成り立たない」と云う養老孟司氏の言葉を思い出します。所謂教養部が廃止されましたが、一般教育内容に本質的な改革は感じられません。あの一年が動機萌芽を遅延させているのではと思

いました。六年一貫教育を目ざし医学部サイドから積極的に策を講じることに望まれます。

若い先生方に一言、教育研究・診療に精励する者には政治は無縁でしょうが、少なくとも目先のことでなく大きなビジョンを持つこと、執行部の動向に目を向けておくことも大切なことと思えます。

そして教授会は報告、承認の場ではなく意見発言の場であることを銘記して欲しいと思います。

「研究の基盤は実験にあり」との理念のもと、教室員共々実践躬行してまいりました。お陰様で恵まれた環境のもと、教室をあげ研究学会でそれなりの成果を得ることが出来ました。中でも、幸運にも三大生理学会といわれる日本病態生理学会

(第十一回)、日本生理学会(第八十回)、日本臨床生理学会(第四十三回)を主宰させて頂き光栄に思っております。

最後二年間は実体的な「総合医学研究センター」へ移籍になりましたが、従来の生理学教育参画への機会、総研での研究の場を与えて頂き、大学からは微々たる研究費にも拘らず科学研究費のお陰で研究を続けることが出来ました。ただこの制度施行には審議すべきことが多々残されているように思えます。

退職後は心機一転、臨床の場で生理学を活用出来る機会に恵まれました。在職中に賜りました多大なご支援とご厚誼に心から感謝申し上げます。福岡大学医学部の益々の発展を祈念して止みません。

祝「第9回 福岡大学医学会賞」

金賞(1名)

青木光希子
Establishment of three malignant peripheral nerve sheath tumor cell lines, FU-SFT8611, 8710 and 9817 : Conventional and molecular cytogenetic Characterization

銀賞(2名)

濱田 義浩
MK-1 expression in carcinoma of the ampulla of Vater as a predictor of improved prognosis after surgical resection

藤野 正礼
Pitavastatin-induced downregulation of CCR2 and CCR5 in monocytes is associated with the arrest of cell-cycle in S phase



医学会賞受賞者を囲んで(左から岩本先生、濱田先生、青木先生、藤野先生、岩崎医学部長)

福岡大学医学会 第56回例会および第30回総会【報告】

日時:平成19年10月10日(水) 17時から 場所:医学部臨床大講堂

- 第56回福岡大学医学会例会 【進行】 集会幹事 岩本 隆宏
 - 開会の辞 集会幹事 岩本 隆宏
 - 会長挨拶 医学部長 岩崎 宏
 - 第9回福岡大学医学会賞受賞論文講演
 - 講演1 講演者…青木光希子 座長…鍋島 一樹
 - 講演2 講演者…濱田 義浩 座長…竹下 盛重
 - 講演3 講演者…藤野 正礼 座長…胡 啓二郎
 - 第9回福岡大学医学会賞金賞論文投票
 - 講演 座長…岩崎 宏
 - 講演1 講演者…岩本 隆宏 (薬理学教授) 「イオン輸送体を分子標的とした新規治療法の開発に向けて」
 - 講演2 講演者…中川 尚志 (耳鼻咽喉科学教授) 「こどもの人工内耳」
 - 講演3 講演者…岩下 明德 (筑紫病院病理部教授) 「Idiopathic mesenteric phlebrosclerosis -A new clinicopathologic disease entity-」
- 第30回福岡大学医学会総会 【進行】 庶務幹事 西村 良二
 - 議事 議題
 - ①報告事項
 - ②平成18年度会計報告および平成19年度予算案
 - ③その他
- 第9回福岡大学医学会賞授賞式 【進行】 集会幹事 岩本 隆宏
 - 開票結果発表
 - 授賞式
 - 閉会の辞 集会幹事 岩本 隆宏

新風

平成19年4月1日付けで本学へ赴任、または昇格された方に自己紹介をしていただきました。



薬理学教授
岩本 隆宏

平成十九年四月より薬理学の講師から主任教授に昇格いたしました。私は、本学薬学部の中では異色の経歴の持ち主と思えます。昭和六十一年に大阪薬科大学大学院を修了後、製薬会社でカルシウム拮抗薬ロメリジンの開発に携わり、その薬理学的研究で学位を取得しました。さらに、新規カルシウム調節薬の探索プロジェクトを自ら企画し、その成果としてNa/Ca交換体阻害薬(KB-R7943)を世界に先駆けて開発しました。その後、予てからの念願であった基礎研究の道へ進むことを決断し、国立循環器病センター研究所に移動して足掛け十年、創薬から遺伝子改変マウス作製まで幅広い技術駆使して、『Na/Ca交換体の構造と機能の研究』に取り組みました。



再生・移植医学教授
安波 洋一

平成十五年四月より福岡大学医学部(薬理学講師)に移動した後も、これらの研究を精力的に推進しました。努力した甲斐があり、『食塩感受性高血圧の発症に血管平滑筋のNa/Ca交換体が重要な役割を果たす』ことを解明しました。さらに、現在、この輸送体が心不全の発症にも深く関わることを明らかにしつつあります。今後もイオン輸送体の研究に精進し、この分野から先駆的な治療法を開発し医療貢献したいと考えています。

私が担当する薬理学(人体機能学Ⅳ)は、生体機能や疾病の病態生理を見据えながら薬物治療の基礎と臨床を学ぶ総合的な学問です。臨床医学へ移行する三年生にとつては、『基礎知識を臨床へ有機的に結合する力』を養う重要な科目と思えます。今年度、明確な問題意識を持って薬理学を学んで貰うため、人体機能学Ⅳの教育要項を医学教育モデルコア・カリキュラムに対応させて全面的に改訂しました。実際の講義・実習では、医学学生の学習意欲を掻き立てるため、対話型講義、専門家特別講義、CBT対策講義、問題解決型実習などの工夫を凝らしています。また、学生研究ゼミを開催し、授業枠を超えた研究コミュニティシヨンの場を提供しています。このゼミで、科学者の『好奇心』や『胸のときめき』を医学学生に少しでも伝えることができたいと願っています。今年度、薬理学教室は平均年齢四十歳というフレッシュなスタッフ陣に一新しました。スタッフ一丸となり、福岡大学医学部の発展ならびに基礎医学の向上に全力を尽くす所存ですので、ご支援を何卒よろしく願います。

この度、平成十九年四月一日より福岡大学医学部に新設された再生・移植医学講座を担当しておりますが、自己紹介をもって就任挨拶といたします。

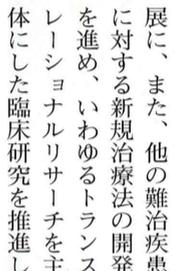
私は昭和四十九年三月に九州大学医学部を卒業いたしました。直ちに九州大学医学部第一外科に入局、九州大学病院第一外科、心臓血管外科、愛媛県立中央病院、九州労災病院で外科修練を積み、その後昭和五十四年に九州大学病院第一外科医員となり、研究を開始しました。外科修練中、脾臓外科に興味を持ち、脾臓移植という新しい細胞移植の治療法の存在を知り、大いにモチベーションをかき立てられ、自らこのテーマを選択、現在まで二十九年間、脾臓移植の臨床応用に関する研究に関わってきました。この間、米国留学、国立小倉病院外科医長、平成四年からは福岡大学医学部第一外科に赴任し、外科臨床に従事しながら研究を続けて参りました。ここまですべての経験は脾臓移植に関与する領域が脾臓病学のみならず、内分泌代謝学、免疫学、細胞生物学など多岐にわたる、学ぶことが多く、研究を遂行する過程で折々に新しい知見に遭遇し、研究の醍醐味、楽しさを体得したからだと思います。また、この研究に興味を持つ大学院生にも恵まれ、現

「医療はサイエンスでなければならぬ。今の医学は希望者には海外の有給ボジションを紹介し、五人が米国留学を経験しました。この中には現在ハーバード大学医学部 Assistant Professor となっている小玉正太博士がいます。最近五十六年は世界トップレベルの研究成果が得られるようになり、また福岡大学で各連携の開始することができ、今までの研究の意義を実感し、更なる発展を期しているところではあります。

今後の方向性として、再生・移植医学講座は福岡大学病院との拠点形成により脾臓移植を一層推進し、福岡大学病院での移植医療発展に、また、他の難治疾患に対する新規治療法の開発を進め、いわゆるトランスレーショナルリサーチを主体にした臨床研究を推進して参ります。皆様方のご支援をよろしく願います。

看護学教授
兼岡 秀俊

私は医師の第一歩を、人口八万人の地方都市でスタートしました。そこでは戦前以来の木造の建物に相応しい、汗まみれ、涙まみれの医療を経験しました。大学院在籍中にスタンフォード大学に留学し世界最先端の医学に触れる好機に恵まれ、大学院修了後佐賀医科大学に職を得ました。それまでの経験から、若い私は医学生や研修医の皆さん達との飲み会では決まって、



看護学教授
兼岡 秀俊

「医療はサイエンスでなければならぬ。今の医学は希望者には海外の有給ボジションを紹介し、五人が米国留学を経験しました。この中には現在ハーバード大学医学部 Assistant Professor となっている小玉正太博士がいます。最近五十六年は世界トップレベルの研究成果が得られるようになり、また福岡大学で各連携の開始することができ、今までの研究の意義を実感し、更なる発展を期しているところではあります。

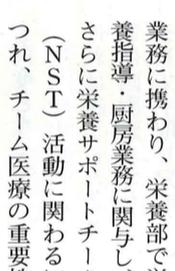
今後の方向性として、再生・移植医学講座は福岡大学病院との拠点形成により脾臓移植を一層推進し、福岡大学病院での移植医療発展に、また、他の難治疾患に対する新規治療法の開発を進め、いわゆるトランスレーショナルリサーチを主体にした臨床研究を推進して参ります。皆様方のご支援をよろしく願います。

この四月に開設されました医学部看護学科に医学部微生物免疫学教室から配属となりました。福岡大学に赴任当初は三年ほどで他の職場に移るつもりが、三十年近く在職し、更に新設の学科で働くことは、私にとってやや想定外のことで、うな気はします。しかし、医療現場での看護師の位置や職務の重要性が喧伝される今、質の高い看護師を育成する教育に携われることは大変光栄なことと身を引き始めています。「自分史」から言えば「想定外」が多かったのでしょうか。家庭の事情で高校卒業後は就職ですが、自分の居る場所に違和感をおぼえ、その後幸いに医学部に入学できて、卒業の時、たまたま外科の教授が高校の先輩に当たり、誘われるままに入局して数年を外科医として過ごしました。そのうちアメリカへの留学の話があったのが殆んど突然にフランスに行くことになり、これがその後合計四年近くヨーロッパを彷徨する元になります。帰国後は外科のポストがあったのですが、大学院時代にお世話になった先生から福大の基礎医学(微生物学)の教室に行ってくれとの要請があり、短期間なら引き受けました。ところが、

木政秀現教授のもとでは、癌の抗体療法や超音波を利用した癌治療などの基礎的研究に従事してきました。四月からも共同研究の形をとらせてもらっていますが、今のところ講義の準備と会議に明け暮れる毎日、研究に費やせる時間はあまりありません。医学科では免疫学と生化学の講義に関わっていました。看護学科では主に看護形態機能学という科目を担当し、解剖学、生理学、生化学、細胞生物学等を広く含んだ科目を、浅く広く(狭く?)、一部は医学科解剖学教室のご協力を仰ぎながら教えています。看護学科ではただ一人臨床経験のない貴重な教員ですが、教育に大変真面目で熱心な看護の先生達から、少くも看護の世界を教えるつもりです。看護師を育てるのは医師を育てるのに負けず大変手間のかかることだということもわかってきました。立派な看護学科棟が廃墟にならないよう、また早く学部として独立できるよう貢献できればと思います。医学科の皆様のご援助をよろしく願います。趣味は数も機会もだんだん減ってききました。川に立ちこみ、流れる毛針に魚が飛びつくのを楽しんで待っているときが一番好きです。

看護学教授
黒木 求

今年四月開設されました医学部看護学科に医学科生化学教室から昇格移動しました。広島県福山市で生まれ、富山大学薬学部を卒業、同大学院で薬理学、大阪大学大学院で免疫学を学びました。昭和五十四年に福岡大学医学部生化学教室に助手として採用され、松岡雄治現名誉教授のもとで腫瘍マーカーCEAの研究に取り組み、CEAファミリー細胞接着分子(CD66、CEACAM)の遺伝子、タンパクの構造や機能を明らかにしました。さらに黒



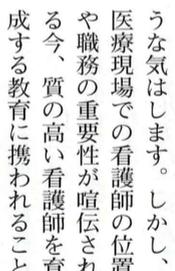
看護学教授
黒木 求

「医療はサイエンスでなければならぬ。今の医学は希望者には海外の有給ボジションを紹介し、五人が米国留学を経験しました。この中には現在ハーバード大学医学部 Assistant Professor となっている小玉正太博士がいます。最近五十六年は世界トップレベルの研究成果が得られるようになり、また福岡大学で各連携の開始することができ、今までの研究の意義を実感し、更なる発展を期しているところではあります。

今後の方向性として、再生・移植医学講座は福岡大学病院との拠点形成により脾臓移植を一層推進し、福岡大学病院での移植医療発展に、また、他の難治疾患に対する新規治療法の開発を進め、いわゆるトランスレーショナルリサーチを主体にした臨床研究を推進して参ります。皆様方のご支援をよろしく願います。

術短大の助教、職業人生終盤の七年間は大病院の看護部長を経て昨年度で三十九年間にわたる看護職を辞しました。このたび縁あって福岡大学医学部看護学科の教職員として奉職することにになりましたが、再度、看護学生の教育に携わることになり、振り返れば入職後、九大看護学校卒業という専門学校教育に飽き足らず、当時珍しかった社会人大学生として経済学を学び、四十年代にして経営学部の修士の門を叩き、これが後の看護管理者として組織学を実践に移す大きな礎となりました。しかしながら、私の担当は小児看護学です。新生児期から成人(小児疾病継続患者)に至るまで四半世紀にわたり小児医療の世界で子どもの健康問題に携わって参りましたが、それは教育の視点なしには語ることはできない奥深い看護の世界でした。特に大病院ではそのほとんどが小児がんを含む難病を持つ子供たちで占められています。長期間を病院で過ごすことが当然と思われ、そのキーパーソンは親であり二十四時間常に身近にいる看護者でありましょう。

私の経験例ですが、先天的な内臓疾患で乳幼児期をほぼ全期にわたり入院生活を送り、成人期になっても外来治療を欠かせないでいる青年で、今では社会福祉関係の仕事について他人の幸せのために活躍しております。本人は「自分の入院生活が苦しむ人への思いにつながった」と聞きました。別の女子は、自らの入院体験が看護師への志望を選択させたと話しておりました。さて今の私は、「あんな



看護学教授
黒岩 中

赴任後程なく教室の主任教授が九大に戻ってしまい、私が早期に外科へ戻るきっかけを失った形になります。しかし、それから三十年近く福大にお世話になろうとは思っても見なかった、この世に「浮き世」と申しまし、時に「浮き世」と申しまし、草のごとき人生でしょうか。「科学」の世界にも浮き沈みがあるようで、免疫学の分野では免疫細胞の司令塔たるヘルパーT細胞に関しこの二十年ほど支配的であったTh1/Th2 paradigmが新しいTh17の発見で正に消え去ろうとしています。今、このTh17と感染が先行して起る「自己免疫的疾患」の関係に大変興味を覚え、このことを考えることを看護師教育と同時に一つの「脳の刺激」にしようと思っています。

木政秀現教授のもとでは、癌の抗体療法や超音波を利用した癌治療などの基礎的研究に従事してきました。四月からも共同研究の形をとらせてもらっていますが、今のところ講義の準備と会議に明け暮れる毎日、研究に費やせる時間はあまりありません。医学科では免疫学と生化学の講義に関わっていました。看護学科では主に看護形態機能学という科目を担当し、解剖学、生理学、生化学、細胞生物学等を広く含んだ科目を、浅く広く(狭く?)、一部は医学科解剖学教室のご協力を仰ぎながら教えています。看護学科ではただ一人臨床経験のない貴重な教員ですが、教育に大変真面目で熱心な看護の先生達から、少くも看護の世界を教えるつもりです。看護師を育てるのは医師を育てるのに負けず大変手間のかかることだということもわかってきました。立派な看護学科棟が廃墟にならないよう、また早く学部として独立できるよう貢献できればと思います。医学科の皆様のご援助をよろしく願います。趣味は数も機会もだんだん減ってききました。川に立ちこみ、流れる毛針に魚が飛びつくのを楽しんで待っているときが一番好きです。

看護学教授
尾首 睦美

一九六七年、九州大学医学部附属病院に職を得て以来、看護師長、九大医療技

看護師になりたい」という子どもたちに、後ろ姿を見せられる看護師を育てるべく使命を持って福岡大学に参りました。「人を育てる」ということ、それは「人は育つ」という前提をもとに、教育環境作りと学生の感受性を高める方法を目指して行かねばなりません。看護の魅力や伝授するには長い道のりが必要ですが、まずは初めの一歩から。よろしくお願いたします。

看護学科教授

金山 正子



基礎看護学担当の教授として着任した金山です。どうぞよろしくお願いたします。私は、海の幸、山の幸に恵まれた自然豊かな山口県で育ちました。看護学の基礎と実践は山口大学で学びました。その後、山口大学医療技術短期大学看護学科および山口大学医学部保健学科において、看護学の教育・研究に携わり、また経済学研究科や医学研究科においても学ぶ機会を得ました。

マニアルや院内教育研修プログラムなどを作成しました。これらの活動から私が再認識したことは、社会のニーズに応え、質の高い看護を提供するために看護学の基礎教育と継続教育の充実と連携がとても重要であることです。また、心理的・社会的側面からのケアがとて大切であることも痛感しました。

私は、これから新たな気持ちを持って、看護学科の学生が「看護とは何か」を考えながら自ら成長していくことができるよう、一緒に学んでいきたいと思っております。

看護学科教授

国武 和子

今年四月に医学部看護学科に着任しました。生まれは、久留米市です。高良山から始まる耳納連山の麓、筑後川沿いで育ち、生まれ育った原風景がいつも脳裏にあり、長く郷里を離れていて、漸く故郷に帰ってきたという日々を過ごしています。

長く関東・神奈川県で過ごし、そして九州・長崎に行き、故郷が近くなったものだと思っていた矢先の本学でのお仕事の話があり、自分の中で故郷への思いを募らせることが出来たと言えそうです。長く世間様のお世話になり、社会が私を育ててくれたという思いがあります。何となくおこがましいのですが、残り時間を社会に恩がえしと言う気持ちがないわけではありませぬ。こんな気持ちになったのも、前任地で六ヶ月間の国外研修の機会をいただき、韓国・ソウルの韓国社会保健研究院での経験からかも知れません。日本の仙台市

看護学科教授

藤垣 静枝



に二年間日本語を学ぶために留学していた女性から韓国語を学ぶことになりました。たが所詮年齢には勝てず、韓国語をマスターするには至らず帰国でした。それでも、日常の生活を過ごすには困ることはありませんでした。住まひは、ワンプロック先には、明治の元勳・伊藤博文の私邸だった場所があり、日本とはなじみのある地域でした。周囲は、日本に留学し、帰国後大学で働いている人が多く、常にきづかっけてくれ、携帯電話が鳴り、最初の挨拶は、「こんばんは、おはよう」から始まり、最初は「なんじゃらほい」でした。そのうちその意味も分かり、人情が厚い国民性であることも分かり、今もその付き合いは、つかず離れずの関係です。38歳を訪ね、非武装地帯と言っているのがあれが武装地帯であるという事実も目のあたりに見、現実を無視できない身近な出来事として衝撃を受けることもありました。あらためて、日本の近代史を学びなおすということから私ができることを見つめなおすことが始まったのが社会に恩返しと言いうことになったのかなと考えています。看護学科では、老年看護学を共に学び、学生へ教えるというスタンスで過ごせたらと考えています。

私の看護の出発点は福岡市です。路面電車が走り、まだまだ、のどかだった福岡市、その時代に九州大学医学部附属看護学校を卒業し、九州大学医学部附属病院に就職しました。その後、北九州の産業医科大学病院において開設時より二十五年間、主に看護師長として看護管理に携わって参りました。この豊富な臨床経験を看護教育に反映できればと思います。平成十六年四月に長野県看護大学の看護教育・管理助教授として看護基礎教育に携わることができました。同大学は道を選びました。三年間という短い在任期間でしたが、講義やゼミを通して看護や看護管理に関する考えをより確かなものにするのができ、しかも、信州の地を築きあげることができました。九州での生活が長い私にとっては信州の冬は厳しく、「雪かき」は初体験でした。しかし、夏はクーラー要らず、扇風機のみで過ごせます。景色は抜群です。大学のある駒ヶ根市はアルプスに囲まれた街、研究室の窓からはアルプスの山々が臨まれ、空気はおいしく、花々はあざやかに咲き誇っていました。山、温泉、蕎麦、ワイン、果物、雪、等々を楽しんできました。長野での生活は、眠っていた私の旅ごころ、遊びごころ、食通と酒通ごころ(?)を呼び起こし目覚めさせたのです。また、人に恵まれました。今まで接点の

ない領域の方々と親交をもつことができ、貴重な財産となりました。

福岡市はとてもおしゃれで好きな都市です。今後の抱負は、信州で目覚めた旅ごころ、遊びごころ、食通と酒通ごころを日々感じながら生活していきたいと考えています。特に遊びごころは大事にしていきたいです。まずは落語を聞きに行く予定です。

最後に、福岡大学の看護学科は新設であり、大学院の開設時に関わった経験のある私にとっては、創っていく楽しみにワクワクする魅力を感じています。当看護学科の創設に微力ながら努力致す所存です。

生化学准教授

宮本 新吾



昭和五十八年度に九州大学を卒業し、九州大学医学部産婦人科に入局しました。入局後は、周産期に従事し学位を取得しました。平成元年より細胞生物学・分子生物学的手法による婦人科悪性腫瘍を研究テーマに変えて研究および臨床に従事するようになり、平成五年から平成八年までの三年四月米国立保健衛生研究所に留学し、インテグリンシグナル伝達機構の解明に従事しました。帰国後、九州がんセンター婦人科に三年間婦人科悪性腫瘍の治療に専念しました。そのころから、新たな治療開発を考えるようになり、平成十三年より「H-B-E-G-F」を標的とした治療開発」を

手掛けてきました。平成十六年度から文部科学省が「トランスレーショナル・リサーチ」事業から支援を受け、本格的な医師主導治療を企画することになりました。いろいろの状況を考え、平成十七年より福岡大病院産婦人科・瓦林達比古教室にお世話になりました。国内初の医師開発の薬剤による医師主導治療の遂行に向けて、平成十九年より福岡大学医学部・生化学教室(主任教授・黒木政秀)に在籍し、産婦人科・血液腫瘍内科・生化学教室をはじめ福岡大学のみさんの助けをおかりして、本年度十一月より医師主導治療を開始する運びとなりました。

福岡大学に着任してからは多くの方々の協力が得られ、着実に臨床試験の準備ができました。今回の臨床試験が、多くの患者さまの命を助けるだけでなく、福岡大学にとっても大きな貢献となることを心より願っています。

趣味は特になく、現在、臨床試験に備えて体力をつけて体重を減らすことに最も関心があります。こまめにジムに通っていますが、医師主導型治療は想像以上に激務なため睡眠時間がもう少しほしいのが現状です。

心臓血管外科学准教授

森重 徳継



本年四月より講師より昇格させていただきました。一九八三年に福岡大学医学部を卒業し、同年六月より同心臓外科(浅尾学初代教授)に入局しました。胸部に大動脈疾患)に貢献してありますが、学童時より機械いじりや模型作りが好きでしたこと(いまでも鉄道模型作りが趣味です)と、人工心肺装置を使い一時的に心臓の機能を止めて治療を行うダイナミックな魅力に惹かれたことが、心臓外科を選んだ理由でしょうか。

生まれ・本籍は朝倉郡ですが、育ちは福岡で、城西中学、城南高校、福大と市内で過ごし、卒業後はJensen University(ルギー王国)留学時と大村市立病院心臓血管病センターに出向いた期間を除くと、永らく城南区七隈に居住してきましたが、この

平成十九年四月一日付けで福岡大学形成外科准教授を拝命いたしました小坂正明と申します。生まれは讃岐うづんで知られた香川県高松市。昭和五十九年に大阪南部にある近畿大学医学部に卒業し、同大学形成外科に入局しました。日本の頭蓋顔面外科(クラニオフェイスリヤルサージェリー)の草分けとして知られた上石(かみいし)弘教授に師事し、二十余年にわたり修行させていただきました。形成外科は、熱傷、頭蓋狭窄症や口唇口蓋裂などの体表先天異常、頭蓋底外科、褥瘡・難治性潰瘍、皮膚悪性腫瘍、軟部組織再建、四肢外傷、微小血管外科、美容外科などその対象は極めて広域です。「何でも出来るオールラウンドな形成外科医を育成する」という指導方針の下、頭先から爪先まで(文字通り)、数多くの症例を経験させていただきました。途中、四年間博士課程で生理学第一講座(秩父志行教授)において神経再生に関する研究をさ

形成外科学准教授

小坂 正明



せていただきました。この四年間は、外から自分の医局を観察できた大変貴重な時間でした。一時は生理学者に、と誘われもしました。が、先ずは形成外科の専門医を目指して臨床に復帰し、以来、診療・手術、学会発表、論文執筆と気がつけば入学以来ずっと(なんと三十年近く)近畿大学医学部キャンパスに籠っており、まさしく「井の中の蛙」になっておりました。上石教授退任後、彼の同門である本学形成外科大慈弥裕之教授にお声をかけていただき、今回のご縁となった次第です。

趣味は特許を考えること(全くお金にはなりません)が、最近のブームは博多うまいものめぐり(ありすぎて困ります)、スポーツは学生時代に空手道をかじっており、医者になってからは時折学生たちの練習の邪魔をしてきただけなのに恥ずかしながら名譽四段を頂戴しております。

福岡大学形成外科は本年より講座となり、多くの若い人材が集いつつあります。ライフワークである頭蓋顔面外科や褥瘡治療をさらに発展させるとともに、次世代への橋渡し役として大慈弥教授の新しい教室運営の一助になれば望外の喜びでございます。何卒ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



看護学科准教授

中嶋 恵美子

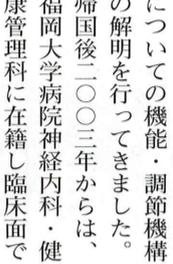


私は、一九七八年福岡大学看護学部に入職以来三十年間を、ここ福岡大学のメディカルゾーンで過ごしてきました。最初の配属部署は福岡大学病院四階西病棟、次いで七階病棟に勤務し、いろんな患者・家族の皆様から「看護する喜び」と「看護の奥の深さ」を教えていただきました。一九八四年から福岡大学附属看護専門学校の看護教員として、十二年間看護基礎教育に携わり、学生の成長を見守り支える楽しさを知りました。そして一九九五年から四年間臨床に戻り、福岡大学病院の看護部長を経験し、二〇〇〇年から再び福岡大学附属看護専門学校で、看護学生の教育とともに、福岡大学における看護教育を学士課程に発展させる努力をしてまいりました。今年やっと、福岡大学医学部看護学科が開設し、私のミッションの第一歩が終了した感があります。

「福岡大学における看護教育を学士課程に」という大学への最初の要望書は一九九二年に提出されています。以後、毎年毎年大学に対し看護学課程の設置の必要性を訴えてきました。それは、福岡大学附属看護専門学校の同窓会や教職員だけでなく、福岡大学病院や福岡大学筑紫病院の看護師、そして地域の医療施設で働く看護師たちの願いだったのです。

薬理学講師

上原 吉就

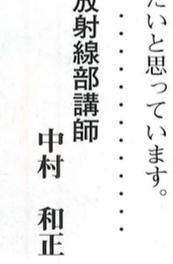


一九九三年に福岡大学医学部を卒業後、福岡大学医学部第二内科に入局し、循環器・高血圧・代謝病を学んで参りました。研究面では福岡大学大学院医学研究科(病態生化学系循環生理化学)で主に心血管組織レニン・アンジオテンシン産生系の研究に従事し学位を取得致しました。二〇〇〇年からはドイツInstitut für Klinische Chemie und Laboratoriumsmedizin, Universität Münsterへ約二年半、その後二〇〇二年からはスイスInstitut für Klinische Chemie, Universitätsspital Zurich

一九九二年には十一校しかなかった看護系大学は、二〇〇七年四月には一五七校を数えます。今や大学間の競争は学士課程ではなく大学院レベルに変化して来ています。九州に最初の看護系大学を設置し、時代をリードするつもりが最も後発になってしまいました。しかし、なるべく早い時期に「九州に福岡大学医学部看護学科あり」といわれる存在になることをめざし、この新しい医学部看護学科の一員としてしっかりと土台を創ることが、私のミッションの第二部であると思っております。今その第二部の幕があがったところで、今まで以上に精進努力しますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。……

放射線部講師

中村 和正

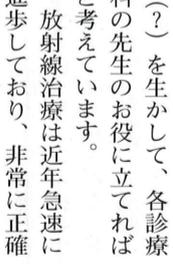


一九八八年に九州大学医学部を卒業し、九州大学放射線科に入局、九州大学(医学部附属)病院、佐賀県立病院好生館にて研修させていただきました。その後九州大学大学院に進学し、放射線の増感効果をテーマとして、放射線生物学の研究を行いました。それ以後は再び九州大学病院で放射線治療を専門として、診療、研究に従事いたしました。一九九七年にはスウェーデン・カロリンスカ研究所に留学させていただきました。高精度放射線治療の研究を行ったこともよき思い出です。

二年間久留米大学に籍をおいていました。久留米在籍中は、医局人事により中央病院をはじめ様々な関連病院で、高度先進医療から僻地医療まで幅広く経験させていただきました。その後、北海道大学、東京大学と大医学部を渡り歩き、さらに高度先進医療を学ばせながら、二〇〇二年十月より福岡大学にお世話になっております。福大へは生体部分肝移植を立ち上げのお手伝いをするために参りました。福大病院の生体部分肝移植は、二〇〇五年五月に第一例目を成功させて以来、現在まで四例行いました。おかげさまで四例全て生存されており、生体臓器移植で問題となるドナーの術後も全例順調な経過をとり、現在の健康状態も良好に過ごされています。今後、せっかくなので立ち上がった福大病院の肝移植がしりすばみで終わらないようにすることが課題です。福岡大学および福大病院の皆様、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。……

消化器外科講師

山内 靖

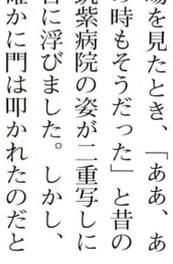


一九九一年に宮崎医科大学(現宮崎大学医学部)を卒業後、学外の臨床研修病院(徳洲会大隅鹿屋病院)で外科医としての研修をスタートしました。ここでプライマリケアを初め外科一般のトレーニングを受けました。一九九五年には岸和田徳洲会病院消化器内科で内視鏡医としてのトレーニングを受け、また一九九七年に国立がんセンター中央病院にて肝胆膵外科の手術治療を学びました。ご縁があり、二〇〇〇年に福岡大学第二外科に入局いたしました。入局後は、旧生化学第一(主任黒木政秀教授)にお世話になりながら基礎研究の分野で学位を取得させていただきました。二〇〇二年からはデンマークのコペンハーゲン大学王立病院に留学する機会を与えていただき、臨床肝移植に従事しながら移植システムのノウハウを学びました。また研究面では再肝移植後の予後予測モデルを構築し、再肝移植レシピエントの選択基準を作成しました。帰国後はコペンハーゲン大学との交流を続けながら国際交流の面でも尽力しています。これらの経験から臨床では肝胆道系疾患に興味を持つに至り、この分野での診療を中心に行っています。

消化器外科、乗富智明です。私は平成元年久留米大学医学部を卒業し、久留米大学第一外科(旧)に入局しました。その後、二年半の留学期間をはさんで約十年間久留米大学に籍をおいていました。久留米在籍中は、医局人事により中央病院にて肝胆膵外科の手術治療を学びました。ご縁があり、二〇〇〇年に福岡大学第二外科に入局いたしました。入局後は、旧生化学第一(主任黒木政秀教授)にお世話になりながら基礎研究の分野で学位を取得させていただきました。二〇〇二年からはデンマークのコペンハーゲン大学王立病院に留学する機会を与えていただき、臨床肝移植に従事しながら移植システムのノウハウを学びました。また研究面では再肝移植後の予後予測モデルを構築し、再肝移植レシピエントの選択基準を作成しました。帰国後はコペンハーゲン大学との交流を続けながら国際交流の面でも尽力しています。これらの経験から臨床では肝胆道系疾患に興味を持つに至り、この分野での診療を中心に行っています。

消化器外科講師

豊島 秀夫

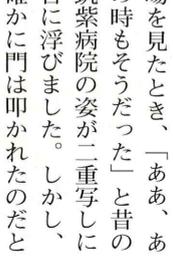


私が大学五年生の夏休みに夜須町の検診調査に向かっている時に、筑紫病院の前を自動車を通ったことがあります。衛生学教室の教授が、「あれが今度福岡大学が買った筑紫病院だよ。」と指を指しておられました。その時は、「ああそうなのか」と漠然と思うだけでした。そして研修員二年目に三班に分かれて筑紫病院を回ることにになりました。現在とは比べ物にならないような質素な状態でしたが、第一班はひまな病院、第二班は普通の病院、第三班は忙しい病院としたいに発展していく姿は心地よいものであったと記憶しています。平成十六年四月に筑紫病院に就任し、内科第二は総合診療部へと変化しようとしていました。その変化の中で、「自分たちはゴミ箱内科なのか」という問いがありました。「私は、そう思う」と考えました。呼吸器に限っても、肺を扱っていても、消化器科に近く、睡眠時無呼吸は循環器科に近い。入院の1/3は肺炎という感染症が占め、外来では1/4は喘息というアレルギー性疾患です。地域は自分の得意分野でパフォーマンスすることを求めていると思えます。そのすべてで標準的な治療を提供する病院であるべきで、最近呼吸器という専門に限定することにすら限界を感じています。病院の評価が定まるのは五十年と言われています。筑紫病院が完成し、その次の新病院が計画されるころに当たります。その時には自分は生を受けていないかもしれない。学会で歴史のある施設が素晴らしい発表をしているのを見ていたり、やまやまと思ったり、医者に成り立てる時には感じなかった伝統の重みというものでしょうか。新しい筑紫病院が完成するにまだまだ多くの紆余曲折があるでしょう。志半ばで筑紫病院をさらされた多くの先輩学びました。基礎研究室には足掛け七年半いたことになり、その後、九州大学眼科で眼科一般診療を行うかたわらで、遺伝性眼疾患に対するゲノム解析と迅速診断システムの構築に関する研究を行ないました。現在、向野利寛教授のもとで、主に網膜硝子体手術の手術療法について御指導を頂いています。福岡大学筑紫病院眼科は福岡県中南部における網膜硝子体疾患の治療センターであり、向野

ために尽くしていく立場に置かれたことを自覚しつつ、今まで以上に努力していきたいと思っております。……

筑紫病院眼科講師

吉田 茂生



本年四月一日より福岡大学筑紫病院で勤務させていただきます。筑紫病院が完成し、その次の新病院が計画されるころに当たります。その時には自分は生を受けていないかもしれない。学会で歴史のある施設が素晴らしい発表をしているのを見ていたり、やまやまと思ったり、医者に成り立てる時には感じなかった伝統の重みというものでしょうか。新しい筑紫病院が完成するにまだまだ多くの紆余曲折があるでしょう。志半ばで筑紫病院をさらされた多くの先輩学びました。基礎研究室には足掛け七年半いたことになり、その後、九州大学眼科で眼科一般診療を行うかたわらで、遺伝性眼疾患に対するゲノム解析と迅速診断システムの構築に関する研究を行ないました。現在、向野利寛教授のもとで、主に網膜硝子体手術の手術療法について御指導を頂いています。福岡大学筑紫病院眼科は福岡県中南部における網膜硝子体疾患の治療センターであり、向野



教授以下、地域の皆様には御満足いただけるよりよい診断治療を提供すべく、日々精進しております。多彩な症例を経験させて頂くと同時に、私自身も主に白内障の手術指導を行なっています。

一九八五年に卒業後、福岡大学医学部第一内科に入局し、第一内科、第二内科で臨床研修を終えた後、奥村尚教授(現福岡大学名誉教授)の肝臓研究室に入り、特に坂口正剛講師(現秦病院)の下で超音波検査を中心とした画像診断、肝生検による病理診断や肝細胞癌に対する経皮的エタノール注入療法などを行ってまいりました。一九八九年からは同第一外科の池田靖洋教授(現福岡大学医学部総合医学研究センター教授、眞栄城兼清講師)の御指導の下で内視鏡的逆行性胆膵管造影、内視鏡的乳頭括約筋切開術や経皮経肝胆道下レナージ術を勉強させて頂きました。一九九二年十二月から福岡大学筑紫病院消化器科に移動し、八尾恒良教授(現福岡大学名誉教授)、松井敏幸助教授(現消化器科教授)、坂口正剛講師の御指導の下で、肝胆膵疾患を担当しています。

学位論文は『Usefulness of tumor pressure as a prognostic factor in cases of hepatocellular carcinoma where the diameter of the tumor is 3 cm or less』

分野の胆膵疾患領域で地域医療に貢献したいと思っております。さらに臨床研究とともに、今まで以上に教育して頂いた臨床の考え方や技術を少しでも多くの後輩に伝授し、人材育成に努力して行きます。学生にも記憶に残る教育実習や講義を行います。御指導、御鞭撻の程、宜しくお願い致します。



看護学科講師 岩永 和代

看護学科創設に伴い、看護専門学校より異動いたしました。専門は成人看護学です。消化器外科病棟、整形外科病棟に勤務し、多くの手術療法を受ける患者の看護を実践したことから、周手術期看護に興味をもち研究しております。

看護は、人々の生涯全般にわたり、健康な人から疾病をもった人を対象としていますが、特に外科病棟では、手術という非日常的な出来事を体験する患者に関わることとなります。手術を受ける患者は「手術が無事に終わること」を願ひ、自分の命と向き合う体験をしています。術後は身体的な痛みや、ドレーンやガーゼに覆われた傷、モニターや点滴に繋がれ、自分の身体をどう扱ってよいのか戸惑っています。手術は終わっても、食事や排泄などの日常生活の変更に強いられ、手術によって社会的活動の制限を生じてしまう、ボディイメージが変わってしまうなど、そこから新しい生

活過程を獲得していくことが必要になります。そのように、ひとりひとり違った反応を示す患者に日々接しながら、手術室やICU、病棟の看護師は高い判断能力を発揮して看護を提供しており、患者のQOLの維持・向上にかけがえのない役割を果たしています。

しかし、周手術期に提供されているさまざまな看護ケアの中には、まだエビデンスが確立していないものも数多くあります。術前の剃毛や術後の絶対安静など、研究的取り組みによって、看護ケアへの概念が変化したことも一再ではありませんが、また、手術療法の発展・変革は著しく、それを取り巻く看護ケアの変遷も当然起こってまいります。

日々多くの手術患者のケアに携わる看護師の豊富な経験をもとに、現象をひとつひとつ明らかにし、エビデンスを導いていくような研究を実践していきたいと考えております。また、教員として、看護への思いを学生に伝え、情熱をもった看護職が育つような教育をしたいと思っております。

先生方のご指導のほど、よろしくお願い致します。

看護学科講師 田中 美加



本年の四月より看護学科(地域看護学)に着任いたしました。大学院では人類生態学を専攻し、環境とヒトに焦点を当てた研究を行いました。当初は、一子に

おける化学物質曝露をテーマに、動物モデルを使用した行動影響や組織学的な変化の検証が興味のある分野で、とあることから参加した開発途上国での調査をきっかけに、フィールドワークの楽しさと公衆衛生的視点の重要性を実感するようになりました。元来、子供や自然が大好きでしたので、途上国の自然と屈託なく笑う子供達の笑顔が忘れられなくなりました。

その後、保健師教育に携わり、日本の公衆衛生の現場を見る機会をえて、日本と世界における健康の意味すること、公衆衛生や地域看護の寄与すべきことは何であるのか深く考えるようになりました。

福岡大学に新設された看護学科において、公衆衛生の担い手である保健師教育にかかわることができるとを、責任と未熟さを感じながらも大変うれしく思っています。どうぞ今後とも、ご指導、ご協力よろしくお願い申し上げます。

看護学科講師 吉川 千鶴子



平成十九年四月一日付で福岡大学病院より医学部看護学科に異動しました。臨床と教育を行ったり来たりしながら今日に至りました。

専門は基礎看護学です。思えば十七年前に、やはり臨床から教育に異動になりました。看護専門学校で最初に担当したのは日常生活の援助の単元でした。朝起き

て洗面し、歯磨きをする、身だしなみを整える、食事をする、排泄をする、身体を清潔にするなど日常当たり前にしていることを看護技術として教えるのが教育内容です。

十三年の臨床経験がありましたが、看護の基本に立ち返るチャンスが頂いたと思えました。一つ一つの看護技術に対し、何故そうするのか意味を追求しながら自分自身の技術も磨く機会になりました。学生に、ただ方法を伝授するのではなく、身体を拭くハンドタオル(ウオッシュクロス)はテキスタイルは27cm×28cmが丁度よいと書かれているが、手の大きさと巻き方による違いはないか。石鹸を使って身体を拭くとき、拭

き取る回数で皮膚のPHはどのように変化するかなど疑問を投げかけ、学生と確かめながら技術を探究したものです。教員としてのキャリアがないのにも関わらず、看護技術は繰り返しの練習でうまくいくものが多いのですが、何故そうするかを問うことを外さないで欲しいと考えていました。

聖路加看護大学の講義を行っていた際、菱沼典子先生は、看護技術について次のように話されました。「技術にはアート、エンジニアリング、テクノロジーがある。アートは伝承の知、エンジニアリングは経験知で、なぜそうするのかわがたくさんあります。

1は理論があって生まれた技術。アート、エンジニアリングの技術をテクノロジーのレベルまで上げていくにはどうすればよいかが看護の課題である」。

看護技術をテクノロジーのレベルに引き上げるには、わかっていなければならぬことが二つあります。一つはなぜ効くのかという作用機序であり、二つ目は本当にどれくらい効くのかという臨床効果です。看護が持っている技術は薬のパワーや手術のパワーに比べて刺激が小さいので、作用機序や臨床効果を客観的に立証するのは難しいことです。

実際、臨床で患者の回復につながったケアを経験しながら立証できなかったことがたくさんあります。

教育の現場に再び身を置き、基礎看護学を専門にする以上、看護技術を探究し続けたいと思っております。近年、看護教育の大学化や専門看護師の教育が充実し、これまで当然とされていた看護技術に疑問が投げかけられています。さらに、看護教育と臨床が協働し、よりよいケアを追及していくことが盛んになっていくことを頼もしく思います。臨床の方のお力を借りながら、人々にとって安全・安楽なより良いケアの探求をしていきたいと思っております。

教室紹介 筑紫病院整形外科

筑紫病院整形外科は、昭和六十年七月の開院当初から開設されています。開設以来十九年間に渡り部長を務められた松崎昭夫教授が平成十六年三月退官され、四月より塩田悦仁准教授を新部長に「患者さんにとって最も利益になる医療」をモットーに日々診療にあたっています。整形外科一般のほか、リウマチ・骨粗鬆症、スポーツ整形、肩・膝関節疾患、股関節、手の外科には特殊再来を設けています。救急告示病院指定に伴い平成十七年度から救急も24時間制ですべて受け入れており、骨折な

どの外傷が多く整形外科一般やプライマリケアを学ぶのに適した環境となっています。BSLの学生さんには主治医とともに入院患者を担当してもらい、患者さんへの接し方、診察法、診断に至る考え方、治療計画の立て方や手術療法の実際、術後経過など実践を通して学び、最終日にはPCでプレゼンテーションをしてもらっています。

平成十八年度の年間外来患者数は約一、八七一人、年間手術症例数は六〇八例と益々増加傾向にあります。傷は朝帯再建術、半月縫合、骨接合術など基本的に鏡視下手術で対応しています。肩疾患ではスポーツ障害の

局長、藤・スポーツ)、秋吉祐一郎助教(外来医長、股関節)、藤澤基之助教(病棟医長、肩・スポーツ)、福井孝明助手、江島晃史助手、浅原洋資助手、荒木剛助手の八名です。手根管症候群はゲージを利用した手掌部だけの小切開で行なっています。橈骨遠位端骨折では最小侵襲のオリジナルの手術法(Conehead wedding screw)を開発し国際的評価をうけています。膝疾患では、変形性関節症に対して骨切り術から人工関節置換術まで柔軟に対応し、外傷は朝帯再建術、半月縫合、骨接合術など基本的に鏡視下手術で対応しています。肩疾患ではスポーツ障害の

運動処方や腱板断裂、関節唇損傷に対する鏡視下の低侵襲手術を行なっています。股関節の臼蓋形成不全や大腿骨頭壊死症に対する各種骨切り術や人工関節置換術にも対応しています。

近隣の先生方の御協力のおかげで平成十八年度整形外科の平均在院日数は十二・九日、紹介率六十一%を達成しており、四月から筑紫病院は地域支援病院の認可を受けています。八月から地域の十三施設とともに大腿骨頭部骨折の地域連携バスを稼働させています。今後とも福岡大学医学部整形外科との密接な連携、活発な人事交流によって高い診療レベルを維持し、筑紫医療圏の中核を担えるよう充実をはかっています。

筑紫病院内視鏡部講師 植木 敏晴



一九七九年に福岡大学医学部に入学し、学生時代は医学部準硬式野球愛好会や高校球児並みの練習や試合に明け暮れていましたが、幸運にも西医大や全医大で

優勝することが出来ました。さらに他学部が中心の準硬式野球九州選手権大会でベスト四に入り、全国大会にも出場でき、良い思い出になりました。

一九八五年に卒業後、福岡大学医学部第一内科に入局し、第一内科、第二内科で臨床研修を終えた後、奥村尚教授(現福岡大学名誉教授)の肝臓研究室に入り、特に坂口正剛講師(現秦病院)の下で超音波検査を中心とした画像診断、肝生検による病理診断や肝細胞癌に対する経皮的エタノール注入療法などを行ってまいりました。一九八九年からは同第一外科の池田靖洋教授(現福岡大学医学部総合医学研究センター教授、眞栄城兼清講師)の御指導の下で内視鏡的逆行性胆膵管造影、内視鏡的乳頭括約筋切開術や経皮経肝胆道下レナージ術を勉強させて頂きました。一九九二年十二月から福岡大学筑紫病院消化器科に移動し、八尾恒良教授(現福岡大学名誉教授)、松井敏幸助教授(現消化器科教授)、坂口正剛講師の御指導の下で、肝胆膵疾患を担当しています。

学位論文は『Usefulness of tumor pressure as a prognostic factor in cases of hepatocellular carcinoma where the diameter of the tumor is 3 cm or less』

で小肝細胞癌に関して腫瘍内圧が高い症例は再発が多く、生命予後が悪いことを報告しました。特に現在の専門は膵炎、総胆管結石の内視鏡的治療などの良性疾病とともに胆道癌、膵癌などの胆膵悪性疾患です。

本年四月から筑紫病院は地域医療支援病院になりました。今後は、一層地域の先生方と連携し、特に専門

「親心・子心(25)」
「お医者様
いらっしやいませんか?」

救命救急センター講師 益崎 隆雄



ドラマでありがちなワンシーン、飛行機の中でウツと胸を押さえて倒れる乗客。意識はなく、顔面蒼白で喘ぐような虫の息、瀕死の状態である。かけつけた客室乗務員が泣きそうな顔で「誰かこの中にお医者様はいらっしゃいませんか?」と

叫ぶ。
さてこのとき、学生諸君の中で「医学生ですがお手伝いします。」と言いつつ何人が手を挙げられるでしょうか。

医学教育モデル・コア・カリキュラムの設定や、共用試験実施機構によるOSCE: Objective Structured Clinical Examination (客観的臨床能力試験)の導入、また一般市民へのAED(自動体外式除細動器)使用認可という社会情勢の変化を踏まえ、当救命救急医学講座では、二年前に五年生の病院実習(BSL)の内容

を大幅に改訂しました。その改訂の目的の一つが「目の前で倒れている人を助けられることができるようになる」です。医師として当たり前のことかもしれませんが、それが意外に難しいのです。

救命救急医学講座では、まず三年生の「臨床医学入門」で、救急患者の初期診療におけるprimary survey(一次検索)とsecondary survey(二次検索)を学びます。primary・secondaryそれぞれにABC Dアプロ

うって気持ちはないのか、我々が行ってきた教育は間違いであったのかと忸怩たる思いがします。話は戻りますが、二年前からBSLでどこも実技に力を入れるようにし、一週目で気管挿管や除細動などの技術を中心とした実技指導を行い、二週目は三日間かけて二人ずつ実技試験を実施するようにしました。

一方、うれしいこともあります。数年前から、夏休みに救命救急センターで実習したい学生はどうぞと呼びかけています。例年希望者は一名あるかないかだったのが、今年なんと七名の学生(M3・M4)が当直まで参加してくれました。

「A airway: 気道の確保」を行い、次に「B breathing: 人工呼吸」と心肺蘇生の手順の基本的なアルゴリズムを学びます。四年生の「救命救急医学」の講義でまた繰り返しABC D。そして、四年生終了時の診断学実習で、練習用の人形を相手にABC Dをみっちり実践し、

BSLで当センターにやってきました学生に会うと愕然とさせられます。初日に「ブライマリサーベイ?セカンダリー?なにそれ?初めて聞きました」。実技の指導では、人形相手とはいえ、患者がC P A(心肺停止)に陥るまで何の処置もせず呆然と立ちつくしている人を一秒でも早く助けよ

合格してくれませんか。でも、このままだと「誰かこの中に」で寝たフリをする医者を世に出すことに成りかねないので、最終日に不合格者を全員集めて再試を行います。そこでまた不合格なら、さらに土曜日に。それでもダメなら夏季・冬季

は実際に胸骨圧迫心臓マッサージをはじめとする一次救命処置にも参加できた学生もいました。ほとんど仮眠を取る暇も無く朝のカンファレンスに出席し、クタクタになりながらも帰る際には、大変有意義な経験ができた、さらに勉強を重ねて患者さんのお役に立ちたいとみんな目を輝かせながら感想を述べてくれました。これからも実技実習には力を入れて行きたいと思っています。

私が福岡大学医学部卒業生がいつか出会う「誰かこの中にお医者様いらっしやいませんか?」という場面で、さっと手を挙げHERO(HEROINE)になれるように。

腎臓・膠原病内科学

教室紹介

平成十九年四月から内科学第四は腎臓・膠原病内科学と呼吸器内科学に改組され、病院の腎臓内科は新たに腎臓・膠原病内科としてスタートしました。院内の人員は教授(斉藤高雄)、准教授(中島徳)、講師(村田敏晃、小河原悟、笹富佳江)、助教(安部泰弘、石村春令、三宅勝久、助手(宮原義登、玉井路加子、中下尚登)です。

腎臓・ネフローゼ症候群や腎不全などの腎疾患及び関節リウマチや全身性エリテマトーデス(SLE)などの膠原病の診断と治療です。腎生検の組織診断は光学顕微鏡、蛍光抗体法、電子顕微鏡標本により病院病理部で行われていますが、当科では臨床的立場からその診断内容を検討し、綿密な治療方針を定めています。

その際、斉藤らが作成に当たった、日本腎臓学会における「腎生検病理診断標準化」や、厚生労働省研究班における「難治性ネフローゼ症候群診療指針」のほか、国内、海外の優れた研究成果

果や、当科における豊富な経験も参考としています。さらに、急性および慢性腎不全の診療では、保存的治療だけではなく、末期腎不全における透析療法を行っています。六月から西別館四階に血液浄化療法センターが移転し、現在二十ベッドで運用しています。将来三十ベッドまで増える予定です。大学病院としては屈指の規模を誇っています。

膠原病は、特異的な症状を有し、発症・増悪には、自己免疫現象が強く関与しますが、その多くは難治性であり、的確な鑑別診断を必要とします。代表疾患に

は、関節リウマチ、SLE、強皮症、多発性筋炎・皮膚筋炎、混合性結合組織病、血管炎症候群、シェーグレン症候群、ベーチェット病、成人発症スチル病などがあります。その多くは、発熱、皮疹、関節痛などを初期症状とするが、腎臓や肺をはじめとする多臓器を障害する慢性再発性の難治性疾患となる危険があります。当科では副腎皮質ステロイドや免疫抑制剤の適切な使用による治療を行なっています。

研究面では遺伝子変動動物を用いたりポ蛋白系球体症やFcレセプター欠損症の病態解明、糖尿病性腎症モデル動物に対する治療研究、腎炎・ネフローゼ症候群や腎不全における脂質に関する基礎的研究、免疫抑

製薬の薬物動態、難治性ネフローゼ症候群やIgA腎症に対する治療研究をおこなっており、十一月に開催されるアメリカ腎臓学会にも多数の演題を発表予定です。さて、平成二十年五月に当科主催で日本腎臓学会学術総会を開催します。福岡で開催されるのは実に三十六年ぶりであり、約四、〇〇〇人の腎臓分野の研究者が集まり、最新の研究成果が発表される予定です。また腎臓病に関する市民公開講座も予定されていますので、地域の住民の皆様にも是非参加していただきたいと思ひます。

長い間
ありがとう
ございました



(平成十八年十月一日〜平成十九年三月三十一日まで)に退職された方

○豊福 明講師 (歯科口腔外科) 以上、三月十五日付け

○菊池 昌弘教授 (生理学)

○今永 一成教授 (健康管理センター)

○浅野 喬教授 (健康センター)

○佐々木 悠教授 (筑紫病院内科第二)

○原田 博文助教授 (耳鼻咽喉科学)

○藤原 俊幸講師 (細胞生物学)

○山口 覚講師 (小児科学)

○雪竹 浩講師 (総合周産期母子医療センター) 以上、三月三十一日付け

学位取得

次の方は、平成十九年三月二十二日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

課程修了による学位取得者

- 中村 友紀 (人間生物系専攻)
- 青木光希子 (病態構造系専攻)
- 倉持 均 (病態構造系専攻)
- 松岡 信秀 (病態構造系専攻)
- 江夏総太郎 (病態構造系専攻)
- 平山 伸 (病態構造系専攻)
- 林 由浩 (病態構造系専攻)
- 森田 勇 (病態構造系専攻)
- 阿南 章 (病態構造系専攻)
- 安部 泰弘 (病態構造系専攻)
- 宮原 義登 (病態構造系専攻)
- 能野 貴史 (病態機能系専攻)
- 舌間 寛士 (病態機能系専攻)
- 森下雄一郎 (病態機能系専攻)
- 金海 武志 (病態機能系専攻)
- 河野 理子 (病態機能系専攻)
- 鉢嶺 顕 (病態生化学系専攻)
- 岡村 圭祐 (病態生化学系専攻)
- 古賀 佳織 (病態生化学系専攻)
- 清原 義明 (社会医学系専攻)
- 塚田 淳也 (社会医学系専攻)
- 松下 満彦 (社会医学系専攻)

論文提出による学位取得者

- 真山 崇 麻酔科学助教
- 喜多村泰輔 救命救急センター助教
- 藤野 泰祐 学外者

医師国家試験に103人が合格

第一〇二回医師国家試験(二月十七〜十九日実施)に二二三名が受験し、一〇三名(新卒八十六名・既卒十七名)が合格した(合格率は七八・〇%)。